

「願いなさい。行きなさい。」

(ルカによる福音書 10:1-12,16-20)

「七十二」は異邦民族の数を表すと言われます。七十二人の派遣は、全世界へ福音が伝えられること、またそのために派遣される者たちについて書かれていることとなります。主イエスはこの七十二人に対し、宣教地への道において守らなければならないことを告げます。「収穫のために働き手を送ってくださるよう、収穫の主願いなさい。」とあるように、彼らはまず「願う人」であることが求められます。さらに、「行きなさい。わたしがあなたがたを遣わす。」と続きます。宣教とは「願う」「派遣される」ものだということです。願う先には神がいます。派遣するのは主イエスです。つまり、宣教は遣わされた者たちの行為ではなく、その人々を通して働く主ご自身の業なのです。宣教者の後ろには主イエスと神とがおられるから、「小羊」のように無力な人間であっても、「狼の群れ」からも守られ、励まされ、使命を果たすことができます。「財布も袋も履物も持っていくな」という指示も、背後に主イエスと神がおられるからです。自分の知識や経験、持ち物に頼るのではなく、積極的に主に寄り頼む宣教者を通してこそ、そこに神の働きが明らかにされます。

着いた先の家ではまず、「この家に平和があるように」と告げます。平和を妨害する神と対立する力は、人から神の祝福の声を遠ざけ、他者との交わりを断ち、人を孤独に追いやります。それゆえ、派遣された者たちは、分断の原因である「違い」を超えることが求められます。具体的には、派遣先の家でも町でも、「出される物を食べ、また飲む」こと、さらには「家から家へと渡り歩く」のではなく、関係に留まることが求められるのです。その交わりにおいてこそ、人種、立場、あらゆる違いは分断をもたらすものとしてではなく、その多様な人々が共に食卓を囲む豊かさに変えられ、神からの平和が訪れます。

さて、喜んで帰ってきた七十二人に主イエスは言います。「悪霊があなたがたに服従するからといって、喜んではいけません。むしろ、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」誇るべきは自分ではなく主であり、喜ぶべきは自らの行いではなく、神に憶えられていることです。求められているのは、主に願う、寄り頼み、身をもって神の働きを示す人です。